



大空襲の思い出



長久手市根嶽
もりのがくえん
安井 俊夫さん

昭和十九年、私が国民学校（現在の小学校）に入学した秋頃になると空襲が激しくなってきた。アメリカの大型爆撃機 B 29 の編隊が、日中堂々と来襲し、爆弾や焼夷弾を雨のように投下するようになった。当時、世界最大の爆撃機であった B 29 は、「超空の要塞」とも呼ばれ、日本の一般人の人達からもビーニクと言って恐れられていた。

昭和二十年になると、空襲は更に激しくなった。これに対して、日本の防空体制は、極めて弱体であった。戦争による被害は、東京や、名古屋、大阪などの大都市や工業地帯に集中した。名古屋は、軍用飛行機製造の中心地であったため、六十三回にわたり空襲の被害を受けて、市街地はほとんど焼野原に近い状態になった。

特に、昭和二十年五月十四日の朝の名古屋への空襲は、名古屋市街地北部とその中心にある名古屋城を集中的に爆撃した。正午前に空襲が終って、疎開先（現在の清須市）の防空壕を出ると、名古屋の上空を覆う煙の上に火柱が見えた。私は大人たちと一緒に、一キロ程南の庄内川の堤防まで走った。多勢の人達が口々に「お城が燃えとる。」と言って悲しみ、泣いている人も多かった。名古屋城炎上、その光景は、七十年後の今も忘れられない。

この日の空襲は、後日の記録によると、B 29 だけでも四百四十機以上が来襲し、今でも「名古屋大空襲の日」と呼ばれている。この大空襲では、尾張名古屋は城でもつと言われた、国宝第一号名古屋城の金鯱輝く天守閣、本丸御殿、隅櫓などが灰塵に帰してしまった。この口惜しさ、心の寂しさは計り知れないものがあった。子ども心にも残念で泣けてきた。



戦争は、このように、人の命だけでなく、町も歴史的な文化も破壊する残酷、悲惨な

行為である。太平洋戦争当時の長久手は、農村地帯で空襲の戦禍は免れたが、当時の生活は苦しかったと聞く。そうした苦労の上に築きあげられた現在の地域社会を大切にしたい。

現在の想い

安井 俊夫さん

私が四歳の時に太平洋戦争が勃発し、国民学校二年生の七歳の時に終戦を迎えた。当時の昼夜を分たぬ空襲による爆弾、焼夷弾攻撃、防空壕での避難生活、食糧や生活物資の遅配と欠配、栄養不足、田舎への疎開生活等々、小国民にとっても厳しい毎日であったことは今も忘れません。こうした当時の子ども目線で見えた銃後の生活を後の世代の人達にと考えて、平成二十五年に戦争体験記『大空襲 名古屋のお城が燃えとる』を発刊しました。丁度、終戦七十周年が話題になり始めた頃でもあり、名古屋の小学校での体験談の語りが新聞報道されたことがきっかけで、長久手市子ども達にもという依頼があり、平成二十六年一月から六つの小学校の六年生に各学校の授業に合せて、これまでに十六回、千五百人以上に話をしました。後日生徒一人ひとりの感想文が校長先生から届きました。これがうれしい。

「お話を聞いて戦争は本当に恐ろしいと感じました。」「戦争のことについてよく分かりました。今の平和を大切にしたいです。」という子ども達の顔が輝いています。やりがいを感じます。これからも語り部を続けます。